

第3回：社寺・逸話／伝説・古道（道祖神）

辻堂南部の寺院について、ご案内します。

辻堂南部にある寺院は、俗に南の寺といわれる宝泉寺と、俗に北の寺といわれる宝珠寺と2つがあります。北の寺は「ほうしゅうじ」と読むのが正解ですが、資料ではなぜか「ほうじゅじ」と読まれることが多いです。

南の寺、宝泉寺は別名「光明真言道場」と呼ばれ、大山詣での帰りに参拝に立寄る人が多く賑わったようです。境内には「光明真言供養塔」も建立されています。大山からの道は、茅ヶ崎市赤羽根から南下して宝泉寺に至る赤羽根道、東海道の二つ家を横切り南下する二ツ家道、同じく東海道羽鳥から南西に向かう羽鳥道の3本がありました。光明真言は古代インドの呪文を念誦するもので、宝泉寺はその道場でした（道場とは、仏教を学ぶところです）。宝泉寺は高野山真言宗寺院で藤沢大鋸にある感應院の末寺です。海龍山観音院宝泉寺といい、聖観音を本尊としています。建久2年（1191）、源頼朝の勧請により創建されたと伝わります。隣接する諏訪神社の別当寺でもありました。相模の国準四国八十八ヶ所の第三番札所ですが、神仏分離令により諏訪神社から移設された第八十四番の弘法大師石像も並んで置かれています。

北の寺、宝珠寺は八松山明王院宝珠寺と号します。元々「北の辻」に不動堂という草堂があり、不動明王を本尊とし、元暦元年（1184）に元朝により創建されました。その後、鎮海が中興し、「宝珠寺」と命名しました。元禄7年（1694）火災で堂宇（建物）と文書が焼けてしまいした。文化元年（1804）に「北の辻」から現在地に移転し、明治7年（1874）頃には寺子屋が開設されました。宝珠寺の山号「八松山」は“八つの松の山”と書きますが、この辺りが八松ヶ原（やつまつがはら）と呼ばれていたことの名残です。

北町には浄土宗の念仏堂として女性に信仰された阿弥陀堂がありました（現在はありませんが碑が建てられています）。建立された時期は不明ですが、慶長年間（1596-1615）とされています。浄土宗寺院で藤沢市本町にある常光寺の末庵との文書も発見されています。相模の国準四国八十八ヶ所第十一番札所で、阿弥陀堂の跡地に、現在も弘法大師石像などが置かれています。



諏訪神社（左）と宝泉寺（右）

次に、辻堂南部の神社の紹介をします。

稻荷社は前回触れましたので割愛します。総鎮守の諏訪神社は上諏訪・下諏訪の二柱を祀っています。創建は平治年間(1159-60)といわれますが、定かではありません。7月27日の例祭日には4基の山車が繰り出されます。東町の源頼朝、西町の源義家、南町の武内宿祢、北町の神功皇后の山車です。

しゃぐうじん

東町にある社宮神(田畠社)は地元ではデンパクさまと呼ばれ、創建は元禄年間(1699-1703)といわれ、豊作祈願の農業の神です。その他、辻堂南部には日枝神社、八幡神社、熊の森権現社、天王社など多様な祭神の神社が存在します(辻堂は民間信仰の盛んな土地柄だったことがうかがえます)。

逸話や伝説について話します。

やつまとがはら

源頼朝は建久9年(1198)12月の相模川の橋供養に参列した帰り道に八的ヶ原で源氏義廣・義経・行家などの怨霊を見たとの文書があります。この時に頼朝は落馬し、翌年正月に亡くなつたとされます(しかし、辻堂がその場所にあたるとの確証はありません)。

社宮神(田畠社)には「逆さ葭」の伝承があります。寿永2年(1183)、源頼朝が木曾義仲を追討するとき、京都から鎌倉に向かった佐々木高綱という武将が当地を通過するとき、見る影もない瘦せ馬に乗り、装束もみすぼらしかったのです。村人は高綱の哀れな姿を嘲り笑いました。高綱は憤慨し鞭代わりにしていた葭を地面に突き刺し、村人を罵りました。この辺りは沼地だったのですが、高綱が突刺した葭は根を生やして生い茂り一面の葭原となり、逆さになつた葉っぱを生じました。これが「逆さ葭」の伝承です。

古道は「三つ又」や「四つ角」から放射状に延びています。鎌倉道が西から東へ向かう道でこの経路には諸説あります。四つ角を通る道、北の辻を通る道があげられています。先の光明真言道場道に加え、西の方へ向けては小和田道、南西の方向には大磯道、南の方には仙台道、東の方には藤沢道、北の方には高山道がありました。主な古道の辻や各集落の入口には道祖神が今も置かれています。西町では熊の森の辻に双体道祖神が置かれ、南町では町内会館脇に文字で書かれた道祖神があり、北町では日枝神社の境内に双体道祖神が安置されています。東町では双体道祖神が、堂面に向かう小高い石垣の上にありましたが、平成11年に八松稻荷境内に移されています。

やつまついなり